

# 能を切る

四賢婦人・矢嶋楯子の生涯

文 福永無想



## 第二回 「鶴子の庭訓」

「かあさま、豆腐を買うのば忘れてしもて…今朝の味噌汁は京菜だけでよか？」

「なあんでね。あたを、『抜かりなしのお順』と褒めたばってん、取り消し」

母の鶴子はいたずらに笑って、3女の順子の額を人差し指でつんと突く。それから柔らかな声で、いつものように他の娘らにうながした。

「おつせはご飯をおひつに移して。お久はお膳、お勝はお茶わんとお箸ね」

5歳になった勝子は言いつけを素早くこなし、今では、味噌蔵に味噌を取りに行くのも勝子の役目だ。初めて、勝子を味噌蔵に行かせようとした時のことだった。

「今は冬だけん、甘味噌ば持つてくるとよね、かあさま」

そう口にして鶴子を驚かせた。鶴子は毎年、秋頃に味噌を仕込む。塩気を効かせた味噌は10カ月ほど寝かせるが、直明の血圧を考え、多めの麴と塩を控えて作る甘めの味噌は長くは持たない。だから、仕込みから

しばらく経った、寒い時季に使うようにしていたのだった。

鶴子はそのことを勝子に教えようとして、先に言われてしまった。おそらく、姉たちがしてきたことを見て覚えたのだろうが、このように勝子は幼くして気が回る子だった。

そんな勝子にとって、母や姉らと味噌や醤油、酒を作るひとときは楽しいものだったが、何より待ち遠しかったのは、夜になり手が空いた鶴子が教えてくれる、読み書きや論語の素読の時間だった。

「女も学問ば身につけやん」

鶴子の口癖である。その頃、男子は藩校や私塾、寺子屋などで教育を受けたが、女子は家のことを手伝うのが当たり前とされた時代であった。

天保9(1838)年の冬、どの花よりも先駆けて梅の花がほころぶ頃、勝子の下に5つ違いの貞子が生まれた。この時、父の直明は45歳、母の鶴子にしてみれば41歳での出産であった。それだけに、数年ぶりに生まれた赤子は矢嶋家を明るく照らした。乳をたっぷり吸ったすぐの貞子を抱くと、甘い匂いがする。眠りながらニヤツと何度も笑う赤子の貞子に、

「神様がぐすぐりよらすとだろか」

そう言つて勝子は何度もほおずりをした。

その年、直明は惣庄屋見習いとしての栄転が決まる。一家は益城から芦北郡湯浦に移ることになった。

惣庄屋見習いとは、細川家独特の領地制度「手永」(※)における責任者の惣庄屋を補佐する役目である。惣庄屋には地元の有力者が就くこともあったが、熊本藩の優秀な役人も任命された。

一家が湯浦に移った同じ頃、隣の佐敷手永の惣庄屋に水俣の豪商・徳富美信が赴任した。美信は直明と同年で、長男同士もまた同年。そんな奇遇もあってか二人はたちまち気が合い、以来、親交を深めていくのだった。

湯浦での暮らしにも慣れ、春の訪れを知る頃だった。勝子は一人歩きをするようになった貞子を守り帯で背負い、庭に出て本を読んでいた。そこへ、ゆでたタケノコを干そうと出てきた鶴子が、珍しく声を荒げた。「お勝、あたはその背中に命ばかりとるとばい。読書を選ぶか、子守をするか、どちらかにしなはる」

鶴子のしつづけは、いつも理にかなっていた。そして、子どもらの勉学の時間を取り上げるなど、決してしなかった。そんな鶴子の庭訓は、矢嶋家の娘たちの生き方の礎となつていくのだった。

※手永/細川家が導入した行政制度。藩内を「手永」と呼ばれる区画に分け、政治、経済、軍事、税などを統治した。現在の郡と町の中間に当たる組織で、着任した熊本藩の役人は転勤もあつた。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



### 四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959  
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)  
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)  
※( )は30人以上の団体割引料金

